

ボランティアのあり方

私がこの北上フィールドスタディーで心に残っているのは、現地の方の、「ボランティアの学生が来てくれるだけでうれしい」という言葉と、私自身が楽しくボランティア活動ができた経験だ。北上でのこのような経験から、私の中でボランティアに対する考え方が変わった。

私はこれまで何回かボランティア活動に参加したことがあった。それはボランティアをすることで少しでも困っている人や、誰かの役に立ちたいと考えたからだ。しかしながら、実際にボランティア活動をしてみて、ボランティアの活動は必ずしもボランティアを受け入れる側の役に立つとは限らず、逆に受け入れる側に迷惑をかけてしまうこともあるということをも身をもって体感した。そのようなことから、私はボランティアに対してあまり良い印象を持っておらず、ボランティアがしたいという理由ではなく、あくまでこのフィールドスタディーには東日本大震災から4年がたった今、被災地の現状や震災の復興がどのように行われているのかについて実際に被災地を訪れてみて学びたいと思ったので志望した。その状況をふまえて、復興を進めるために被災地で求められているものはなにか、風化が進むなかで悲惨な震災を未来につなぐために重要なことはなにか、被災地外に住む人間が被災地に対してできる支援はどんなことがあるのか、ということが知りたかった。

このフィールドスタディーで行ったこととして、まず一日目は石巻市の視察ツアーをし、そのあと北上町へ向かった。二日目、三日目は漁業支援の活動をして、四日目には地元のかたがたに楽しんでもらえるようなイベントを企画し、交流を行った。

まず実際に現地に行ってみて思ったのは、被災地はまだまだ復興途中であるということだ。石巻駅前にはいくつかのお店が立ち並び、商店街などもあったが、北上町には住居と海以外はほぼ何もない状態だった。また、よくメディアではハード面での復興は早いということが言われているが、実際には建設中の高盛道路や橋、堤防がまだまだあることに衝撃を受けた。

そして二日目、三日目の漁業支援の活動などを通して思ったことは、北上町の人々はみな明るく優しいということだ。北上町の人たちは、たったの五日間しか北上町にいない私たちに対してとても手厚くもてなしてくださった。漁業支援の活動の内容もカッターでわかめの茎とそうでない部分を切り離すといったもので、本当に誰にでも簡単にできるような作業だった。ボランティアをしたいという学生に対して学生にもできるような簡単な作業を選んでくれたのかもしれない。漁業支援として来たはずが、結果的には受け入れてくれた人たちに気を使わせてしまっているのではないかと少し申し訳ない気持ちになった。そこで、短期的なボランティアに対して素直にどう思っているのか聞いてみることにした。すると漁師さんは「迷惑なんてことはない。ボランティアの学生が来てくれるだけでうれしい。」と答えてくださった。ほかの北上町に住む人にも聞いてみたが、みな一様に「ボランティアとしてよそから人が来てくれるだけでうれしい。」と答えてくださった。この言葉

を聞いたとき、私たちが来たことで少しでも喜んでくれたならばここに来た意味があったと思えるようになった。

また今回のフィールドスタディーには楽しさという要素が多くあったと思う。もちろん学習として北上町を訪れたわけだが、地元の子供たちと外を駆け回って遊んだり、みんなでバーベキューをしたことはとても思い出に残っている。私がこれまでに参加したボランティア活動のなかで一番楽しかったし、来年も来たいと思えた。やはりボランティアにおいて楽しさという要素は重要なかもしれない。

今までボランティア活動は効率的で相手のためになるものでなくてはいけなくて、楽しさという要素は極力少ないほうが良いものだと考えていたが、このフィールドスタディーを通してボランティアのあり方について、考えが変わった。